キリシタン研究の現在
—キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察—[1]

Current Status of Kirishitan Studies: A Study of the Kirishitan Image Formation and the Kirishitan Boom

三輪 地塩
Chishio Miwa

キーワード
キリシタン・イメージ、キリシタン・ブーム、姉崎正治、五足の靴、芥川龍之介

KEY WORDS
Kirishitan image, Kirishitan boom, Masaharu Anesaki, *Gosoku no kustu*, Ryunosuke Akutagawa

要旨
近代日本においてキリシタンという存在が一般に知られるようになったのは、明治後期から昭和前期にかけてのことであった。当初はある種の胡散臭さを伴ったディレッタント的な紛い物と見做されていたが、1900年頃になってキリシタンに関する出版物が発行されたことで徐々にその存在が知られるようになる。更に、1910年代に入り、与謝野鉄幹や北原白秋ら当時の著名な文筆家たちが『五足の靴』を出版したことで、ツーリズム的要素を伴いつつキリシタンの存在は人口に膾炙していく。1920年には大阪府茨木市において、世紀の大発見と呼ばれる茨木キリシタンが発見され、新聞で取り上げられるなどして注目が集まる。そして、1930年頃東京大学の姉崎正治によってキリシタンはようやく学問の俎上に上げられることとなった。このように本研究は、如何なる経緯を辿って現在のキリシタン研究に繋がっているかについて考察する、キリシタン研究史研究である。

SUMMARY

In modern Japan, the existence of the Kirishitan community became generally known from the late Meiji period to the early Showa period. Initially, it was seen as a dilettantish imitation with a suspect origin, but its reality gradually became recognized around 1900 with the publication of Kirishitan. Furthermore, in the 1910s, famous writers of the time such as Tekkan Yosano and Hakushu Kitahara published “Gosoku no kutsu,” and the presence of Kirishitan become widely known among the population, accompanied with elements of tourism. In 1920, Ibaraki Kirishitan were discovered in Osaka Prefecture, which is said to be a great discovery of the century, and it attracted attention when it was featured in newspapers. Around 1930, Masaharu Anesaki of the University of Tokyo finally brought Kirishitan up for academic discussion. Accordingly, this study is a “historical study of Kirishitan research” that extends up to the present time.

1. はじめに

筆者はこれまで幕末明治維新期から昭和初期にかけてのキリスト教史に関心を持って研究し、とりわけ幕末明治期におけるキリシタン殉教の記憶に焦点を当てて叙述研究を行ってきた。本稿は、「キリシタン」という信仰（者）や文化が近代日本で認知され研究対象としてアカデミアの舞台に立つまでの歴史と背景についての研究である。副題に「キリシタンのイメージ形成とキリシタン・ブームに関する考察」と銘打ったとおり、近代日本においてキリシタン・ブームと言うべき時期を経て、キリシタン・イメージが形成されて人口に膾炙するようになるまでの経緯について考察したい。

2. キリシタン史の時代区分と研究の方向

キリシタン研究には様々なアプローチがある。キリシタンという存在をどの時代にどのような切り口で理解するかによって研究対象や方法が異なることによっている。キリシタン史を時代区分すると、まず「キリシタンの世紀」[2]と呼ばれる16世紀のキリシタン全盛期から始まるが、これはポルトガルやスペインとの文化交流史的研究となる。そこから、日本キリスト教史の最初期に関する研究のみならず、極東の日本が欧州と繋がった時代に日本にもたらされた文化や、それにまつわる法制的研究や日本語研究（日葡辞書などの研究）にも研究対象は広がりをみせる。1644年以降、キリシタンは潜伏の時代を迎えるが、この時代の研究が［潜伏／隠れ］キリシタンの研究であ

る。ここから西欧的な、すなわちカトリック信仰の視点からの研究や、日本史研究や民俗学的研究としてのキリシタン研究など様々な分野に分かれている。更に、全国の各藩史など地方キリシタンに焦点を当てたローカルなものや、キリシタン美術研究、考古学的研究、踏み絵やロザリオ、メダイなど「モノ」に焦点を当てた聖遺物研究など様々な切り口がある。

またその呼称について、「キリシタン」と「切支丹」は同じなのか、「カクレキリシタン」という場合、カタカナの「カクレ」、漢字の「隠れ」、平仮名の「かくれ」の語の使用法は何を根拠にしているのかなど、各研究者や時代によって用いられ方が異なっている。近年では「カクレ」「隠れ」よりも「潜伏」を使用する傾向が見られる[3]。だが、必ずしもキリシタン研究者の統一見解ではなく、潜伏していたキリシタンが正式にカトリック信徒になる者たちと、そのまま潜伏時代のカクレ信仰を守り続ける者たちに分かれた結果、後から振り返った際に、前者を「潜伏キリシタン」、後者を「隠れ（あるいは「カクレ」）キリシタンと呼ぶのが、近年の研究者たちによるおおまかな考え方のようである[4]。

このような一連のキリシタン研究について、本研究はそもそも日本においてキリシタンという存在がどのような経緯で世に知られ、学問領域として確立されていったのかについて、その大枠を掴むことを目的とする。言わばキリシタンについてのメタ研究であり、具体的には、日本において現在我々が知るキリシタン・イメージがどのような経緯で形成され世に広まったのか。その「キリシタン像」の記憶形成の変遷に影響を与えた諸現象について考察したい。

我々現在の日本に住む者たちにとって、16世紀に始まるキリシタンの来日、ならびにキリシタン迫害の歴史や潜伏キリシタン信仰が潜伏状態において守られてきたことは、誰もが知り得る共通の歴史と考えられがちである。だが、幕末明治期の日本人たちはキリシタンの出来事について、断片的で偏った知識しか持ち合わせていないのが実情であった。勿論、織豊期から連綿と続くキリシタンの繁栄地である九州北部地方、とりわけ島原、平戸・生月、外海、五島、佐賀、熊本、大分においては比較的身近な存在だったと思われる。だが、幕末明治期のキリシタンたちは、1637～38年に原城を籠城拠点として激しく戦った（かつて「島原の乱」と呼ばれていた）島原・天草一揆について「忌まわしい出来事」として語り伝えており[5]、現在のようなキリシタンに対する歴史認識は乏しかったと考えられている。

江戸中期以降は表向き「キリシタンは存在しない」はずであり、そのために毎年全国民に踏み絵を踏ませ、「宗門人別改帳」のような住民登録台帳に記載してきたわけである。つまり、江戸幕府の手前切支丹が領内に居たら大問題であり発見されると幕府からの処罰は免れず、それゆえ「あなたの領内に切支丹はいるか」と問われれば

「居りません」と表向き答えざるを得なかった。切支丹禁制高札には懸賞金がかけられていたため、むやみにキリシタン信仰を言い表すことは出来ず、周囲が目を光らせている中、表立って自らの信仰を標榜できない時代は文字通りの潜伏状態であった。

幕末明治期になり、西欧列強国からの圧力に屈する形で江戸幕府は開国を決定し、その後、岩倉遣欧使節団からの要請を受けて「キリシタン禁制の高札」が撤去されたのは1873（明治6）年のことであった。岩倉使節団はイタリアのヴェネツィアを訪問した際、この地で天正遣欧使節団や慶長遣欧使節団が残した書簡を見せられたが、これらが岩倉具視らの知識に全くなかったものであったと言われている。つまり岩倉一行は実際のキリシタンについて詳しく知らず、たとえ存在自体を知っていたとしても、それが何者であり、どのような歴史があるのかについて知識がなかったことは明白である。このことについて折田洋晴は次のように述べている。

> 幕末に編纂された『通航一覧』にも遣欧使節についての記載はない。1876年には、仙台での博覧会で支倉常長の遺品が展示されたのを機に、岩倉は太政翻訳局の平井希昌（ひらいきしょう）（1839－1896）に遣欧使節について調査させ、ケンペル[6]やパジェスの著作を使って『欧南遣使考』が刊行された[7]。

岩倉具視は帰国後、欧州で見聞きした「キリシタン」の調査を開始し、洋書を取り寄せて『欧南遣使考』を刊行したのが日本でキリシタンの知識が開かれた始まりであると折田は述べている。1876（明治9）年は切支丹禁制の高札が撤去されてから3年が経過していたので、この頃からキリシタンは日の目を見ることが出来るようになったかと言うとそうではなく、依然としてキリシタンやキリスト教への差別は激しく残っていた時期であった。このような中、キリシタンという存在がいつ頃、如何なる経緯によって人口に膾炙していったのかについて、従来のキリシタン研究ではあまり関心が持たれて来なかった。

3.「長崎博覧会」と「東京帝室博物館の特別展」

平戸・生月地方のキリシタンを研究している中園成生は[8]、その著作『かくれキリシタンの起源』[9]の第五章で、「イメージとしてのかくれキリシタン」を考察している。そこでは、禁教時代のキリシタン・イメージについて、「慶長十九（1614）年に全国に禁教令が出された後は、キリシタン信仰は外部者に秘匿される事となり、信者以外の者が正確にキリシタン信仰のイメージを形作るための情報を得る事は不可能となる」と述べており[10]、正しいキリシタン像が高札撤去後まで開示されなかったことを

指摘する。

以前筆者が研究対象としていた津和野藩（現・島根県津和野町）に流配されたキリシタンについて、当地の領民たちは流配キリシタンを見る機会がなかったため、実際の迫害と殉教について殆ど知られていなかっただろうことを論じた[11]。またこの流配時期（1867－73年）に少年だった文筆家・医師の森鴎外は、幼少年期に自分の住んでいた津和野の町にキリシタンが流配され幽閉されていたことについて生涯語らなかったことなどもその裏付けになると思われる[12]。このように「キリシタン」や「かくれキリシタン」の存在は、当初一般市民に知られなかった状態から、幕末明治期以降、信者以外の人々により、「実体と離れたイメージで認識され」[13]、現在のようなキリシタン・イメージに定着したと考えられる。

熊本大学の安高啓明は、この時代のキリシタン・イメージの形成について、1906（明治39）年5月、東京帝室博物館で行われた第5回目の特別展甲部「嘉永以前西洋輸入品及参考品」によって日本人にキリシタンの物品が公開されることから始まったと述べている[14]。この時のキリシタン関連遺物は、同博物館三号館の陳列所で常設公開され、17のテーマ構成により、洋書、和書、文書、地図、洋画、銅板、学術器機、耶蘇教遺物、外国武器、楽器、道具、陶器、織物、刺繍、革類、貨幣紀念碑・雑、に分類されて陳列されていた。このうち「耶蘇教遺物」の中には、踏絵や浦上三番崩れで捕縛された帳方の吉蔵が所持していた白磁観音立像などが含まれていたという。

この東京帝室博物館の特別展から遡ること29年、明治10年から100日間の会期で開催される予定だった長崎博覧会が計画されていた。ここでも「耶蘇絵板」（踏絵）の陳列が予定されていたが、教部大輔宍戸璣（ししどたまき）は「普通考古之物品」とは異なり、外国との関係に支障をきたす恐れがあることを危惧し、外交上の問題からこれらの出品を中止したのであった[15]。この博覧会が、岩倉遣欧使節団が帰国してからわずか4年後の開催だったため、外国との摩擦を避ける配慮としての出品中止であった。つまりこの時、踏絵を見世物として展示することが外国との軋轢を生むことを当時の政府高官らは知っていたということになる。更に言うと、キリシタン迫害・殉教・殉死に関する物品を人々の興味関心のために陳列することは不敬であること、ひいては、欧米諸国の宗教であるキリスト教を侮辱する可能性があることを、少なくとも教部大輔の役人たちは知っていたことになる。しかし明治初期における一般の日本人たちがキリシタン遺物を目にするようになるのは、先述のとおりここから約30年の時を経てのことであった。

この1906年の東京帝室博物館の特別展では、板踏絵や真鍮踏絵を模倣して作られ、長崎奉行所で実際に使用されていた踏絵等が展示された[16]。現在東京国立博物館に所蔵されているキリシタン関係遺物の多くは、1879（明治12）年に内務省社寺局から引

き継いで長崎県に保管されていた信徒からの没収品が殆どを占めている[17]。浦上三番崩れや浦上四番崩れの時に没収された白磁のマリア観音、ロザリオ、メダイなど、キリシタン遺物の多くが東京国立博物館のキリシタン遺品コレクションの大半を占めており、これらは1879年には既に同博物館の所蔵品になっていたため、1906年の東京帝室博物館特別展でキリシタンに関係する遺物が公の場所で初めて日本人の目に触れることとなった。すなわちキリシタン遺物が公の目に触れたのは明治後期、しかも20世紀に入ってからだったことになる。

4. 書籍によって逆輸入されたキリシタン

では、日本国内で「キリシタン」という存在がどのように認識されたのかと言うと、外国からキリシタン書が輸入されたことに始まっている。「キリシタンが輸入される」と言っているようで不思議な言い方ではあるが、そもそも日本人よりもヨーロッパのキリスト教界、それもカトリック宣教師のキリシタンへの情熱は並々ならぬものがあり「日本で宣教したい」と強く願う宣教師が多くいたことが知られている[18]。国立国会図書館の折田洋晴の解説に依拠しつつ、キリシタン書籍が出版された経緯を纏めると以下のようになる。

明治維新後の新政府は海外の宗教事情を知るために宗教関連の洋書を翻訳することを急務と考えたが、それを担ったのが外交官の鮫島尚信[19]であった。彼は1715年にJ・クラッセが欧州で出版した *"Histoire de l'église du Japon"* をパリで見つけ、日本に持ち帰り太政官本局翻訳係をとおして『日本西教史』として出版した[20]。更に、レオン・パジェスの『日本二十六聖人殉教記』（1862年）[21]と『日本切支丹宗門史』（1869－70年）[22]というそれぞれの著作を基に、パリ外国宣教会の宣教師エメ・ヴィリオンや加古義一らによって翻訳・翻案された『日本聖人鮮血遺書』（1887年）が出版される。更に、パリ外国宣教会司教のフランシスク・マルナスの『日本キリスト教復活史』（1896年）[23]など、19世紀後半になって日本国内においてキリシタン関連書籍、それも邦訳された外国のキリシタン書物が幾つも出版されることとなる。これらの外国書籍が幕末明治期に輸入されたことによってキリシタンについての歴史（特に迫害や殉教にまつわる出来事など）が事細かに日本国内に知られるようになった。

その後、カトリック司祭である浦川和三郎は、キリシタン関連書籍『山口公教史』（1908年）を皮切りに、『日本に於ける公教会の復活』（1915年）、『切支丹の復活』（1928年）とキリシタン史の書物を出版することになる。日本人によって書き下ろされたキリシタンに関する書物、しかも父母が浦上四番崩れの流配者という当事者二世によるキリシタン史の著作である。特に『切支丹の復活』の第3章は、「旅の話」とし

て良く知られるようになり、浦上四番崩れで各藩に流配されたキリシタンたちの処遇についての詳細な記録書として現在も重要な資料の一つになっている。浦川和三郎はローマ・カトリック教会の司祭という立場であることを大いに生かし、地道に重ねた信徒たちへの聴き取り調査を基にして、キリシタンに起きた出来事の実態を著わした。言わば「埋もれていたキリシタンの記憶が掘り起こされた時代」であったと言える。この頃の日本人たちがキリシタンについてどのような知識や印象を持っていたかについて、飯島幡司（まんじ）は三田元鍾著『切支丹傳承』の序文で次のように述べる。

> 我國において、趣味としての切支丹研究が流行したのは、今から十數年前、大正の終から昭和の初にかけてであつた。當時は、切支丹文獻といへば、ずゐぶん如何はしいものでも、骨董的價値を呼んで、奪ひ取るやうに賣れて行つたものである。しかし、もともと信仰に根ざした研究ではなく、また時代の要請に促された研究でもなく、單に好事者の間における風潮に過ぎなかつたから、一時は魘（うな）されるほどにのぼせあがつても、日の經つままに熱がさめて、少数の真摯な研究者を除いては、根のない草のやうに萎んでしまうた。三田君は、この間にあつて、地熱と共に生きのびた潜伏切支丹のやうに、黙黙として研究調査の熱意を抱き暖めて來た少數者の一人である。だから、もとより、浮氣な當て込みの著述ではない。この意味において本書は、新村出博士の近業「日本切支丹文化史」とともに ── 兩書はもとより相違る視野に立つものではあるが ── ほどよく成熟した果物のやうな味をもつてゐる[24]。

飯島幡司（1888－1987年）は、神戸高等商業学校（現・神戸大学）の教授をする傍ら、朝日新聞に入社し論説委員を経て、朝日放送（朝日放送グループホールディングス）社長、関西経済連合会会長などを歴任する財界のいわゆる“大物”でもあった。また同時に9歳で洗礼を受けた生粋のカトリック信徒であり、後にローマ法王庁大聖グレゴリウス勲章を受けている人物である[25]。この飯島が「趣味としての切支丹研究が流行したのは、今から十數年前、大正の終から昭和の初にかけてであつた」と述べているように、1910年頃から1925年頃までにかけてキリシタン研究が流行していたことが示されている。「當時は、切支丹文獻といへば、ずゐぶん如何はしいものでも、骨董的價値を呼んで、奪ひ取るやうに賣れて行つたものである」とあるように、この時のキリシタンへの興味は、新しい研究分野というよりも趣味の段階であり、「信仰に根ざした研究ではなく、また時代の要請に促された研究でもなく、單に好事者の間における風潮に過ぎなかつた」ものと捉えられていたことが分かる。

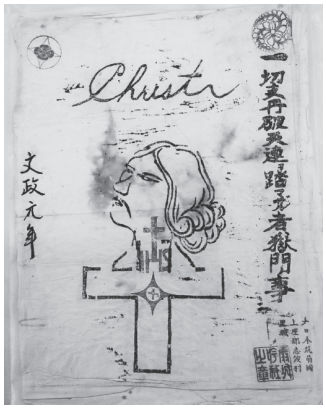
5. 茨木市千提寺・下音羽の遺物発見とキリシタン・ブーム

時を同じくして、20世紀史上最も大きなキリシタンの発見として知られている出来事、いわゆる「茨木キリシタン」が発見された。1920（大正9）年、当時小学校教員であった藤波大超[26]が、東藤次郎氏の所有地からキリシタン墓碑の存在を知りこれを発見したのである。藤波は引き続き、東藤次郎氏に他の遺物を見せて欲しいと何度も懇願するも断られ続けてしまう。約半年に及ぶ交渉の末、藤波の熱意に折れた東氏が、自宅の屋根裏に括りつけて隠していた「あけずの櫃」の存在を教え、これを開示することとなる。1614年、全国に禁教令が発布され、潜伏を余儀なくされた茨木市千提寺・下音羽地域のキリシタンが、20世紀初頭まで「かくれ信仰」を守り通していたことに当時のメディアは色めき立ったと言う。当時かくれキリシタンの信仰を守っていたのは、東藤次郎の母・東イマ、東家の本家である中谷イト、中谷イマの3名であり「三姉妹」と呼ばれた最後の「潜伏キリシタン」であった。彼女らは代々伝えられてきたオラショを唱え、かくれ信仰の祈りを守る生粋のキリシタンであったことも当時の注目を集めるに十分なことであった。この時「あけずの櫃」に入っていたのは、「フランシスコ・ザビエルの肖像画」（神戸市立博物館所蔵）、「マリア十五玄義図」（京都大学総合博物館所蔵）など、極めて美術性の高いキリシタン遺物群であった。

このように1920年以降は、にわかにキリシタンへの興味関心が高まる時期であった。学術研究として一分野を拓いたわけではないが、当時の日本人たちがキリシタンの存在に「非学術的関心」を抱いたことは確かであり、そのことについて清水紘一は藤谷俊雄の言葉に依拠しつつ次のように述べる。

> この間異国情緒に対する文学的関心も高揚し、文壇における北原白秋や芥川竜[ママ]之介らの活躍もあって、地道なキリシタン研究が「南蛮紅毛趣味」的な風潮に流される状況も生じた。この時期の研究が「宗教的、というよりは宗派的・教団的であり、ついて文化史的であろうとして、ディレッタント的におちいり、世界的であろうとして、国際関係史にとどまった」（藤谷俊雄氏）と評されるゆえんである[27]。

ディレッタントとは趣味嗜好の愛好家を意味し、つまり学術的ではないけれども美術品への関心としてキリシタン遺物に注目が集まったということになる。先に示した飯島幡司の「切支丹文献といへば、ずゐぶん如何はしいものでも、骨董的價値を呼ぶ」という発言は大変興味深いもので、これは恐らく当時このような愛好家たちが増えており、いわゆるキリシタン遺物ブームのようなものが起こっていたことが考えら



【図1】紙踏絵

【図2】十字紋様壷

【図3】キリシタン壷・徳利

れる。恐らくこの頃のキリシタン・ブーム期に製作されたと思われる「キリシタン遺物」が、西南学院大学博物館に所蔵されている。その中でも特徴的なのは「紙踏絵」（図1）、「十字紋様壷」（図2）、「キリシタン壷・徳利」（図3）などで[28]、これらは来歴が明らかな真正のキリシタン遺物ではなく、模造品（虚構品）であることが指摘されている。

特に「紙踏絵」については「踏まれたもの」のように書かれているが、紙を踏むことが現実的ではないのはすぐ分かることである。更に言うと、黒田家の家紋である藤巴紋、イエズス会の印章、文政元年（1818年）と敢えて書かれていることや、「切支丹破天連ヲ踏マザル者獄門ノ事」と書いておきながら、1897年に創業された出版社である「扇城吟社」の章が捺印されていることから、明らかに明治後期以降に作成された「偽キリシタン遺物」であることが分かる。西南学院大学の学芸調査員、中禮尚史氏によると「長崎の版画製作業者が、外国人向けの「お土産」として製作したものではないか」と分析している[29]。十字紋様壷も同様に、隠れているキリシタンたちの持ち物にこれだけ堂々と十字架が描かれるのは明らかに不自然なことから、これも偽キリシタン遺物であることが分かる。このような来歴が明らかではないキリシタン遺物が製造されたり販売されたりするのは、真正のキリシタン遺物に対する羨望的な思いがあるか、あるいはそれが利益を得るための商品になる可能性があったからだと考えられる。この明治後期～大正期～昭和初期は、キリシタンが「如何わしい」と言われたり「ディレッタント的」と考えられたりしながらも、キリシタンやその遺物に興味関心が集まった時代と言えるだろう。

6. 姉崎正治による「キリシタン研究」の登場

このような趣味・嗜好が流行する中、キリシタンという存在を学際的フェーズへと引き上げたのが東京帝国大学宗教学講座教授の姉崎正治であった。佐藤吉昭は次のように述べる。

> 日本におけるキリシタン研究の伝統は、……和辻の特異な解釈論、高瀬の広範な視野と厳密な社会科学の方法論を駆使した新しいキリシタン研究に先立って、日本の近代的宗教学創始者であり、キリシタン史を宗教史学として始めて発展させた姉崎正治（1873－1949年）によって築かれた[30]。

また、清水紘一も、「キリシタン研究が本格化したのは明治の中頃で、日欧交渉史の視点から村上直次郎氏によって着手された。以来近時の大戦にいたるまで、姉崎正治・太田正雄（木下杢太郎）・高田成友・新村出・比屋根安定・吉田小五郎各氏の業績が注目される」と述べており、村上直次郎と姉崎正治らが中心となって、学問分野としてキリシタン研究が開始されたことを指摘している。

姉崎正治は、1904年、東京帝国大学文科大学に「宗教学」を開講し、翌年「宗教学講座」を新設した。彼は『宗教学概論』（1900年）、『根本仏教』（1910年）などを著し、日本仏教研究での業績を上げた後、キリシタン研究に着手する[31]。姉崎の最初のキリシタン研究書は『切支丹宗門の迫害と潜伏』（1925年）で、『切支丹禁制の終末』（1926年）、『切支丹迫害史中の人物事績』（1930年）、『切支丹伝道の興廃』（1930年）、『切支丹宗教文学』（1932年）と矢継ぎ早に大作を世に出し、これらはキリシタン五部作と呼ばれる著作群で、キリシタン史を宗教史学として発展させることになる記念碑的著作となった[32]。

7. 文学によるキリシタン・イメージの創出 ――『五足の靴』と芥川龍之介の「切支丹物」――

このように、幕末明治維新期から昭和初期にかけて、キリシタンへの関心が高まる中でキリシタンは徐々に認知されていき、そのイメージが形成されていく。明らかに怪しいと思われる偽物であったとしても、国内外を問わずそれらを購入する人がいたという事実が、この時期にキリシタン・ブームと呼ぶべき潮流が生み出されていた証左となる。次に本章では学問ではなく文学がキリシタン・イメージの形成に一役買ったことについて考えてみたい。

1910年代にキリシタン・イメージを創出した特出すべき出来事は、『五足の靴』という書籍の出版である。この本は1907（明治40）年、与謝野鉄幹、平野萬里、北原白秋、吉井勇、木下杢太郎の5名が九州西岸を巡った紀行文・エッセイである。木下杢太郎が旅行に先立って上野の図書館でキリシタン文献を読み漁った後に、彼がこの旅行を牽引したことで、キリシタン遺跡巡りが主な目的になったと言う[33]。この旅行後に北原白秋が出版した詩集『邪宗門』によって、彼は異国情緒豊かな詩を発表し、文壇に南蛮趣味を流行させた[34]。『五足の靴』は1907（明治40）年8月7日から9月10日までの29回『東京二六新聞』に掲載された連載企画である[35]。この紀行文が1カ月に亘って読まれたことは日本人のキリシタン・イメージに少なからぬ影響を与えたと考えられ、更に1909年頃から「広く明治末期から大正期の文壇に「南蛮趣味」の流行をもたらす原動力となった」[36]のであった。

ちょうどその頃、文豪・芥川龍之介が「切支丹物」と呼ばれる一連のキリシタン小説群を世に送り出した。これらは1916（大正5）年から1923（大正12）年までに著した作品群のことであり、芥川はこの短期間に15本ものキリシタン関連の短編小説を発表している。佐々木啓一は「芥川龍之介のキリスト教観（一）── 切支丹物について ──」[37]の中で、芥川の切支丹物を以下のように分類する。

Ⓐ初期の作品（切支丹を南蛮趣味、異国趣味、異端的対象と認められている作品）
「煙草と悪魔」「尾形了斎覚え書」「さまよへる猶太人」
Ⓑ中期の作品（殉教、仏教との対立、切支丹肯定、審美的傾向を帯びていると認められている作品）
「奉教人の死」「るしへる」「邪宗門」「きりしとほろ上人伝」
「じゆりあの・吉助」「南京の基督」
Ⓒ後期の作品（否定的乃至明確に否定していると認められている作品）
「黒衣聖母」「神々の微笑」「報恩記」「おぎん」
「おしの」「糸女覚え書」

興味深いのは、初期（大正5年10月－大正6年5月・1916－17年）、中期（大正7年8月－大正9年6月・1918－1920年）、後期（大正10年12月－大正12年12月・1921－1923年）というわずか7年のうちに、作品の性質が「南蛮趣味」「切支丹肯定」「切支丹否定」へと変化していることにある。この短い期間に芥川がキリシタンに何を見、何を思ったのか、彼の心の変化について今や知る由もないのであるが、芥川の作風を一般化して語ることは出来ないにしても、この時期に芥川龍之介という当時の言論・文化の影

響者によって日本国内に多面的なキリシタン・イメージが生み出された可能性を指摘することは出来るだろう[38]。

芥川自身、このような切支丹物を書くに至るには、北原白秋や木下杢太郎の影響があったと自身の作品『西方の人』の冒頭で述べている。「……かう云うわたしは北原白秋や木下杢太郎の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはクリスト教の為に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。〜〜」と、キリスト教徒の殉教或いは殉死という出来事に興味を抱いていたと語る。1927年に35歳という若さで自ら死を選んだ彼に、キリシタン殉教イメージは何らかの作用を果たしたのか否か、想像するより他はないことであるが大いに興味を惹かれるところである。

では、芥川はどのようにキリシタンについて学んだのだろうか。佐々木啓一は「切支丹物」に含めていないが、芥川はキリシタンを題材にした『誘惑』という短編を著している。この最後の部分に「後記。『さん・せばすちあん』は伝説的色彩を帯びた唯一の日本の天主教徒である。浦川和三郎氏著『日本に於ける公教会の復活』第十八章参照。」[39]と明記されており、芥川はキリシタンについての基礎知識を、浦川和三郎の著作のような当時広く読まれていたと考えられるキリシタン書籍から得ていたことが示される。

8. おわりに

以上のように、キリシタンが日本において如何にして認知されイメージ定着が行われてきたのかについて述べてきた。幕末明治期には多くの日本人に知られていなかったキリシタンという存在が、外国から輸入された文献と邦訳、外国人宣教師や日本人司祭らの著作、キリシタン文学、そして1920年に茨木市で「かくれキリシタン信仰」がセンセーショナルに発見されたことなどを通し、1930年には学際的地位を得て「キリシタン研究」という学問領域が生み出されることとなったのである。この後、1940年以降から戦後にかけて、アジア太平洋戦争の「敗戦」によってキリシタン・イメージがまた異なる側面で理解されるようになり[40]、更に2000年以降には、既に知られている史料に分析や解釈を加え、より学際的な研究に取り組む時代に入るのであった[41]。上智大学のキリシタン研究者川村信三が述べるように「（キリシタン研究の）新しいステージの研究者は、アナール学派の提唱する『新しい歴史学』や『ミクロストリア』『生活史』などの影響をうけ、前提とすべき多岐にわたる課題を考慮せざるを得なくなった」時代に入ったと言えるだろう[42]。このような中、一般に知られている2018年の世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の登録によって

キリシタン・ブームが再燃し、この流れを受けてキリシタンへの関心や研究もまた新しいフェーズを迎えている。いわゆる実証主義的歴史研究のみならず、言語論的転回、キリシタン遺物の真偽・虚構を問う研究、更にはキリシタン聖地巡礼をダークツーリズムの観点から行う研究など、キリシタン研究の方向は多角的・多方面的に広がって現在に至っている。このような現代的キリシタン研究の傾向や方法などについては大いに興味を惹かれるものであり、更に今後の課題として取り組んでいきたい。

注

1　本研究はJSPS科研費JP22K12984の助成を受けて行われたものである。

2　浅見雅一『概説 キリシタン史』慶応義塾大学出版会、2016年、2頁。

3　2018年UNESCOによって制定された世界遺産の登録名も「長崎天草潜伏キリシタン関連遺産」であり、「隠れキリシタン関連遺産」ではない。

4　「潜伏」「隠れ」「カクレ」の呼称の区別の仕方については、以下の書籍などが参考となる。片岡弥吉『かくれキリシタン ── 歴史と民俗 ──』NHKブックス、1967年、13頁。宮崎賢太郎『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』角川書店、2018年、22–3頁。中園成生『かくれキリシタンの起源』弦書房、2018年、50–2頁。

5　特に、長崎浦上村の潜伏キリシタンであった高木仙右衛門は、その手記で「けつして キリシタン ハ てん のしろのこ ときのもので ありません」（決してキリシタンは、天草四郎の時のような者たちではありません）と述べており、長崎浦上村におけるキリシタンの精鋭と呼ばれる彼らさえも天草四郎を「幕府への反乱を起こした人物」とのイメージを持って記憶していた。（高木慶子『高木仙右衛門に関する研究 ──「覚書」の分析を中心にして』思文閣出版、2013年、126頁）

6　エンゲルベルト・ケンペル（Kämpfer, Engelbert　1651－1716年）ドイツ人医師・博物学者。ヨーロッパ人として初めて日本についての体系的著書『日本誌』を書いた。ヨーゼフ・クライナー『ケンペルのみた日本』、日本放送出版協会、1996年、3–7頁。

7　折田洋晴「日本関係洋古書の我が国での受容について」『参考書誌研究』（第68号）、2008年、勉誠出版、2–3頁。

8　中園成生（1963年－）

9　中園成生『かくれキリシタンの起源 ── 信仰と信者の実相 ──』弦書房、2018年。

10　中園、同書、407頁。

11　三輪地塩「殉教の目撃者」『DEREK』（第34号）、立教大学大学院文学研究科組織神学専攻・立教大学大学院キリスト教学研究科、2014年、85–102頁。

12　森鴎外の娘・杏奴（随筆家の小堀杏奴）は、あの津和野藩でのキリシタン流配の出来事について、父森鴎外は生涯一切何も語らなかったと述べているが、あくまでも父の思いを推し量って憶測として語ったものであり、鴎外が語らなかったのか、或いは単純にキリシタンを見たことがないため語らなかっただけとも考えられる。

13　中園、前掲書、409頁。

14　安高啓明『踏絵を踏んだキリシタン』吉川弘文館、2018年、238–9頁。

15　安高、同書、236–7頁。

16　安高、同書、240–1頁。

17 『東京国立博物館図版目録　キリシタン関係遺品篇』東京国立博物館、2001年、16頁。
18 例えば、日本に派遣された MEP 宣教師 Aimé Villion など。
19 鮫島尚信（1845－80年）、外交官。薩摩藩の留学生として森有礼や五代友厚らとともにロンドン大学に学んだ。
20 折田洋晴「日本関係洋古書の我が国での受容について」『参考書誌研究』（第68号）、2008年、勉誠出版、2–3頁。
21 原著は、L. Pagès, *Histoire des vingt-six martyrs japonais*, 1862.
22 原著は、L. Pagès, *Histoire de la religion chrétienne au Japon*, 1869-70.
23 出版年は原著。邦訳は1986年出版。原著；Marnas, Francisque., *La "religion de Jésus"* (*Iaso ja-kyo*) *ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIX e siècle*, Paris, 1896.
24 三田元鍾『切支丹傳承』、厚生閣、1941年、序文1頁。
25 https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A3%AF%E5%B3%B6%E5%B9%A1%E5%8F%B8（2022年11月23日閲覧）
26 藤波大超（1894－1993年）茨木市安元生まれ。実家は浄土真宗大谷派の寺。旧茨木中学時代の恩師天坊幸彦氏から隠れキリシタンの里が千提寺にあるのではないかとの奨めを受けて東藤次郎氏に協力を求めていたが、東氏は頑なに拒否。その後、所有地にある「キリシタン墓碑」の存在を教えたという。
27 清水紘一『キリシタン禁制史』、教育社、1981年、14–5頁（「　」内は清水による藤谷の言葉の引用）。清水は続けて、「戦後においては、戦前の「南蛮・キリシタン」趣味に対する反省が生まれ、内外史料の一層の発掘を通じて、語学・神学・文学などの各分野で、実証的な研究が進められている」と述べており、アジア太平洋戦争以後になり、キリシタン研究が学問の一分野として確立され出した事を述べている。
28 図1、図2、図3ともに西南学院大学博物館所蔵。（筆者撮影・2022年6月14日）
29 https://www.seinan-gu.ac.jp/museum/wp-content/uploads/2017/publish/news33.pdf（2022年11月24日閲覧・西南学院博物館ニュース33号、2017年12月）
30 佐藤吉昭、前掲書、32頁。
31 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988年、49頁、「姉崎正治」。この項目の執筆者は海老澤有道である。
32 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、同書、49頁。
33 中園成生、前掲書、409–10頁。
34 中園、同書、410頁。
35 五人づれ『五足の靴』岩波文庫、2007年、122頁。
36 五人づれ、同書、138頁。
37 佐々木啓一「芥川龍之介のキリスト教観（一）── 切支丹物について ──」『論究日本文学』（9）立命館大学、1958年、30–8頁。https://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/jl/ronkyuoa/AN0025722X-009_030.pdf
38 https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUC04DHG0U2A001C2000000/（2022年11月24日閲覧・日本経済新聞オンライン2022年10月16日記事「喫茶店、芥川龍之介がインフルエンサー　社交の場庶民に」）
39 https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/188_15281.html（2022年11月23日閲覧・底本は『昭和文学全集　第1巻』小学館、1987年）
40 例えば、長崎で被爆した永井隆が敗戦直後の1945年11月23日、カトリック浦上教会で行った「原子爆弾合同葬弔辞」において、キリシタンの殉教と浦上で起こった被爆を関連させて語っていることは興

味深い言説であった。（三輪地塩「永井隆の「殉教観」── 永井隆における浦上キリシタン「殉教」の「語り」──」『キリスト教学』（61号）立教大学キリスト教学会、2019年、1–21頁）。

41　川村信三他『キリシタン歴史探求の現在と未来』教文館、23頁。

42　川村信三、同書、23頁。